慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代中国語の結果補語と可能補語の関係について
Sub Title	The connection between resultative complements and potential complements in modern Chinese
Author	浅野, 雅樹(Asano, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2000
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.78, (2000. 6) ,p.225(164)- 241(148)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0241

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代中国語の結果補語と可能補語の関係について

浅野　雅樹

1　はじめに

中国語の結果補語をもつ動補構造（以下［VR］と称す）[1]には，その間に“得”“不”を挿入し，各々を肯定形，否定形とする，可能補語を用いた可能表現[2]（以下［V“得／不”R］と称す）がある。［V“得／不”R］に対する一般的な文法説明としては，このような挿入説が用いられる。だが，これはあくまで統辞レベルの形式を重視した説明であり，［V“得／不”R］に関する全ての性質を覆い尽くしているものではない。例えば，この挿入説が用いられることによって，［V“得／不”R］は［VR］から派生するものとして解釈される傾向が強いため，あらゆる［VR］が［V“得／不”R］として成立するという認識がされがちである。しかし個々の両者を観察すると，［V“得／不”R］としてほとんど用いられない［VR］がある。また否定形のみが成立し，肯定形は成立しないと判断されるものなども存在し，決してあらゆる［VR］が［V“得／不”R］として成立するわけではないことがわかる。本稿ではこの点に注目し，従来，結果補語，可能補語と言われてきた二つの補語の関係を明らかにしていきたい。

これまで，この［V“得／不”R］に関しては肯定形と否定形の頻度の不均一性，それが用いられる構文の特徴，助動詞を用いた可能表現との用法上の比較などの視点から，多くの考察がなされてきた。しかし，［VR］と［V“得／不”R］という構造単位の関係から，成立の可否につ

いて詳細な考察をしているものは少ないように思われる。筆者の管見では以下のような指摘が見られるだけである。

大滝1996（26～29頁）では，ある［VR］が可能形［V“得／不”R］として成り立つかということに関してインフォーマント調査を行っている。そしてその調査結果により，「可能を表すV得A[3]形はV不Aが成立する動詞・形容詞の組み合わせでのみ成立する。つまり，可能補語の肯定否定は二つともに成立または二つともに不成立であり，このことはVA型の動詞と形容詞の関係が能力や可能性の基準をあてて判断できるかどうかに対する中国社会の一般常識を反映している。」[4]という原則を見いだしている。その上，具体的に以下の三点を可能補語をもたないVA型の統合意義特徴として述べている。

I）VA型の形容詞が，具体的意味と抽象的意味を持つものであるとき，抽象的意味のほうが補語として用いられる。

II）VA型の表す変化が，人間の意志によってコントロールできない。

III）VA型のうち，「①“的”字構造のなかで必ず“了”を伴う，②予想外の結果を表し，“偏离”[5]の意味を表す」グループは通常の文脈ではV不A形が成り立たない。

高更生・王红旗1996（312～313頁）は，“炒咸了”“裁瘦了”“来晚了”などの過分を示す評価式述補構造[6]は［V不R］形だけをもち，可能を表す［V得R］形はもたないとしている。一方“走累”“洗烦”“学坏”“赶走”“砸碎”などの状態式述補構造については，あらゆる［VR］が“不”を用いて否定形にすることができるが，肯定形ではそのようなことはなく，“走累”“洗烦”“学坏”などは不成立であるとし，“赶走”“砸碎”には「？」を記している。

また，范晓1996（264頁）では“做错”“打输”“跑慢”“起晚”などについて，習慣或いは意味上，可能式へは拡大できないと述べられている。

これらの指摘から，あらゆる［VR］が［V“得／不”R］として成立するわけではないということのみならず，可能形として成立しないとされる［VR］には一定の特徴があることがわかる。またこのような成立の可

否を論ずる際には，意味レベルにおけるアプローチが不可欠であるということも窺えよう。したがって本稿においても，意味レベルの分析を中心にして，構造単位で個々の［VR］が［V“得／不”R］として成立するか否かということを考察し，さらにこれに係わるいくつかの要因について述べてみたいと思う。

2　成立の可否及びその要因について

［V“得／不”R］として多用されるのは，どのような性格の［VR］だろうか。また用いられにくいのは，どのようなものだろうか。まず，このことを明らかにするために，主に下の〈表1〉に示した作者の小説から可能を表す［V“得／不”R］を収集してみた。そして，これらの用例の統計を観察すると，［R］の性質により以下に示すような頻度の差異がみられた。

〈表1〉[7]

	〔V得R〕			〔V不R〕		
	〔R〕が虚義的成分	〔R〕が本義的成分		〔R〕が虚義的成分	〔R〕が本義的成分	
		動詞	形容詞		動詞	形容詞
老　舎	23	1	3	149	16	4
茅　盾	14	0	2	125	22	1
钱钟书	23	3	1	157	24	16
王　朔	11	1	0	130	21	9

〈表1〉の使用頻度を参考にすると，［V“得／不”R］の成立の可否に係わる要因は，おおよそ［VR］の［R］の性質に拠っていると推測できる。よって本稿では，［R］部を担う成分が，①虚義的成分②本義を示す動詞③本義を示す形容詞[8]であるという特徴に基づいて，［VR］を三類に分け（以下各々①（虚）類［VR］②（動）類［VR］③（形）類［VR］と称す），各々の分析をしていくこととする。

2．1　（虚）類［VR］と［V“得／不”R］

上で虚義的成分を具えた［R］で構成されるものを（虚）類［VR］とすると述べたが，本稿では具体的に“到”“见”“住”“好”“完”“成”“着”“动”“掉”“清”を虚義的成分と見なした。これらの［R］については，従来，前の動詞の動作の状態を示す役割をし，動作の結果や目的を示すものではないという意味的解釈がなされたり，字面の意味ではなくて，派生的な意味であるといった解釈がなされている[9]。このため，本義を示し一般に動作［V］に対する結果を表すとされる［R］とは区別して扱われることが多い。

①反正你们的船票要一个星期以后才买得到，（以下略）。〈钱-225頁〉
（あなたたちの乗船切符は一週間たってから，ようやく買えるのだから，）

②史循有一种惯服的药，在炮台湾是买不到的。〈茅-330頁〉
（史循には服用しなれた薬があったが，砲台湾では買うことができなかった。）

③我在那儿一出声，九城八条大街，连天津三不管，都听得见！〈老五-17頁〉
（私がそこで一声出せば，北京の街全体だけでなく，天津の三不管あたりまでも聞こえるぞ。）

④现在时移势异，这种话渐渐听不见了。〈朱-210頁〉
（今では時代が変わり，このような言葉は次第に聞くことができなくなった。）

⑤— 到他们家来的亲戚朋友很少坐得住的 —〈張-98頁〉[10]
（彼等の家に来た親戚や友達の中で落ち着いていられるものは少ない）

⑥马村村长李老喜坐不住了。〈刘-24頁〉
（馬村の村長，李老喜はじっとしていられなくなった。）

①～⑥の下線部は（虚）類［VR］の可能形［V“得／不”R］の用例である。これらの可能形については，まず〈表1〉より，実際に使用される

[V“得／不”R] 全体の大半を占めていて，使用頻度が非常に高いことが指摘できる。また上に列挙した虚義的成分は，紙幅の制約もあり，“到”“见”“住”以外の用例は提示できないが，すべて [V“得／不”R] の [R] として用いられることが確認できる。さらに，各々の [R] は“得”あるいは“不”を介して様々な [V] と結合しており，固定的な結合をなすものではないことも窺える。

このように，(虚) 類 [VR] の多くは可能を表す [V“得／不”R] として使用されているため，(虚) 類 [VR] からは [V“得／不”R] が比較的自由に構成できるものと言えよう。

2．2 (動) 類 [VR] と [V“得／不”R]

⑦～⑫は (動) 類 [VR] の可能形 [V“得／不”R] の用例である。

⑦我的话，一千个日本人里大概只有一个能听得懂。〈老五-444頁〉
(私の話は，千人の日本人の中で聞いて理解できるのはおそらく一人だけであろう。)

⑧“哎？”，铁牛听不懂这两个字。〈老八-133頁〉
(「えっ。」鉄牛はこの二文字を聞いてわからなかった。)

⑨辛楣道：“有人看得中我，我早结婚了。”〈钱-186頁〉
(辛楣は「誰かが私のことを気に入ってくれていたなら，私はとっくに結婚していたよ。」と言った。)

⑩一弹子打不中她，还许打中他，(以下略)。〈張-246頁〉
(銃弾が彼女に命中しなくても，彼に命中するかもしれない，)

⑪我也慢慢找着给人家做点活，饿不死！〈赵-174頁〉
(私もぼちぼち働き口を探すから，飢え死にはしないさ！)

⑫这些话在父母的耳朵里是听不厌的。〈钱-201頁〉
(これらの話は両親にとって，聞き飽きることはなかった。)

“懂”“中”で構成される [VR] は⑦～⑩のように肯定形，否定形の双

方に用いられている。一方，“死”“厌”で構成される［VR］は⑪⑫のように否定形としては用いられるが，肯定形として用いられる例はほとんど見当たらない。そこで両者の［R］を観察してみると，以下のようなことがわかる。上例の“懂”“中”をはじめ“打赢”“吃惯”“学会”“听明白”の“赢”“惯”“会”“明白”は通常，［V］の動作主の希望（期待）[11]を伴う結果，すなわち好ましい結果であることが多い。これに対して，“死”“厌”をはじめ“冻病”“吃腻”“等烦”の“病”“腻”“烦”などは，動作主の希望（期待）を伴なわない，好ましくない結果を示す場合がほとんどである。こうして見ると，“听得懂”は使用され，“饿得死”がほとんど使用されないというこのような現象には，両者の［R］に意味的な相違があり，これが主に関与していることがわかる。したがって，（動）類［VR］が［V得R］として成立するか否かに係わる要因としては，結果の実現に対する動作主の希望（期待）といった意味素性の有無が考えられる。

また，（動）類［VR］の中にはさらに，以下で述べるようなタイプが存在する。

⑬他患病多年，但他坚信自己一定能够打得倒病魔，重获健康。
（彼は病気にかかって何年にもなるが，必ず病魔を退治することができ，健康を回復できるとかたく信じている。）

例文中の［R］の“倒”は語彙的には一見，“死”“厌”と同様に，希望（期待）を伴なわない，好ましくない結果を示すものであると考えられるが，⑬のような［V得R］が使用されるのはなぜであろうか。ここでは，“倒”が文中のどの格成分の状態を述べているかが問題となる。⑬の“倒”という結果は，⑪⑫の［R］とは異なり，［V］の動作主について述べているのではなく動作の受け手，つまり“病魔”について述べるものである。言い換えれば⑪⑫の“死”[12]“厌”は動作主に意味指向[13]しているのに対し，⑬の“倒”は動作の受け手に意味指向しているのである。したがって，動作主“他”にとって“病魔倒”という状況は希望（期待）を伴う

結果，すなわち好ましい結果であり，このような場合に“打得倒”のような［V得R］が容認され使用されるものと考えられる。こうして見ると，［R］が用いられる文の意味構造も［V得R］の成立の可否に関与しているということが窺える。

“倒”のほか，主に動作の受け手について述べる“断”“伤”“灭”などは“倒”と同類の［R］であると言える。よって“砍断”“打伤”“吹灭”などの（動）類［VR］は［V得R］として成立すると判断できる。しかし，同じ“倒”“伤”で構成されるものでも，“昏倒”“跌伤”のように［R］が動作主について述べるものは，可能を表す［V得R］として成立しない点には留意しなければならない。

以上の考察から，（動）類［VR］とその［V“得／不”R］の関係については以下のようにまとめることができる。（動）類［VR］の中には［V不R］として成立しても，［V得R］は成立しないものがある。なぜなら［V得R］として成立するには，［R］という結果の実現に対する動作主の希望（期待）という意味素性が認められることが必要だからである。つまり，“死”“厌”“病”“烦”“腻”のような，通常希望されない好ましくない結果を示し，しかも［V］の動作主について述べる［R］で構成される［VR］は，可能を表す［V得R］として成立しない。

2.3 （形）類［VR］と［V“得／不”R］

马真・陆俭明1997（14～18頁）は，［R］が形容詞で担われる［VR了］[14]を，それらが表す文法意義により以下の四類（〈表2〉）に分類しており，さらに各類の［R］形容詞の性質を記している。

本節では，この四類に依拠し，各類の［VR］が可能を表す［V“得／不”R］形として成立するかどうかを明らかにしたい。その上で，［VR］における［R］の性質（“中性形容词”か，“褒义形容词”か，“贬义形容词”かという）を根拠にして，［V“得／不”R］の成立の可否を検討する。

まず，過分を示すD類について考えてみよう。高・王1996では，上述したように，過分を示す［VR了］は［V不R］形だけをもち，可能を表

〈表２〉[15]

文法意義	〔R〕形容詞の性質[16]
A 预期结果的实现（予期した結果の実現） （例“凉干了”“洗干净了”）	中性形容词，褒义形容词
B 非理想结果的出现（非理想的な結果の現れ） （例“洗破了”“搞坏了”）	贬义形容词
C 自然结果的出现（自然的な結果の現れ） （例“长高了”“变红了”）	中性形容词，褒义形容词， 贬义形容词
D 预期结果的偏离（予期した結果とのずれ「過分」） （例“挖浅了”“买贵了”）[17]	中性形容词

す［V 得 R］形をもたないとされている。過分とは通常好ましい状況を示すものではないため，意味的観点からは，このように否定形だけが成立するとするのが適当である。ただし，［V 不 R］形は一般に成立しないとする説もある。李敏1999（142～144頁）では，A，B，C 各類の［V 不 R］は成立するが，D 類に属するものについては，

“别买短了。”（短すぎるのを買ってはいけません。）

“你放心，买不短。”（安心して，短すぎるのは買いません。）

のように，一定の文脈でしか使用されず，通常は用いないと述べられている。また大滝1996でも，上述したように過分を示す［VR］について，通常の文脈では，可能を表す［V 不 R］は成り立たないと指摘されている。したがって，これらの記述を照合して考えると，D 類の［VR］については，［V 得 R］は不成立であり，［V 不 R］は成立するものの，それは限られた文や文脈においてのみ使用されるという解釈が妥当であろう[18]。

このことを考慮にいれた上で，次に［VR］の［R］の性質を根拠として考えてみよう。

過分を示す D 類の［R］には，“中性形容词”に限定されるという特徴が見られる。このことから，“中性形容词”で構成される［VR］については，一見，D 類の［VR］に対する上記の解釈が予測される。しかし，

〈表2〉で示すように，この形容詞で構成される［VR］であっても，その全てが過分を示すというわけではなく，A類またはC類の意味を示す場合もある。また同一の［VR］でも，例えば“挖深了”は以下の⑭⑮で示すように，用いられる文によって過分を示す場合と，〈表2〉のA類の予期した結果を示す場合とがある。

⑭他那个坑儿挖深了，需往坑儿里回填些土。〈陆1990-1頁〉
（彼はあの穴を深く掘りすぎたので，土を少しもどさなければならない。）

⑮你要我挖的坑儿我已经挖深了。〈陆1990-1頁〉
（あなたがわたしに掘るように要求した穴は，すでに深く掘りました。）

以上のことから，“中性形容词”で構成されるものについては，この多義性のため，［VR］という構造単位では［V“得／不”R］の成立の可否は明言できないことになる。

ただし，これらをさらに深く考察すると“中性形容词”で構成される［VR］の中には，多義性が無く，過分しか示せないものも存在する。陆俭明1990（1～7頁）にはこの特徴をもつ，二つの［VR了］のタイプが示されている。一つは，“买大了”“买短了”などのタイプである。これは，動詞［V］の示す動作行為が関連する事物（前後の名詞性成分）の性質に対して制約を加えないという特徴を持つものである。もう一つは“挖浅了”“挖小了”などのタイプである。これは，動詞の示す動作行為が関連する事物の性質に対して一定方向の制約を加えるのであるが，［R］で示される性質は動作による一定方向の制約とは逆方向であるという特徴をもつものである[19]。したがって，“中性形容词”で構成される［VR］にあっても，これら二つのタイプに属するものに限っては，［V得R］は不成立であり，［V不R］は成立するものの，それは限られた文や文脈においてのみであると判断できる。

以上，主として〈表2〉の過分を示すD類について述べたが，A，B，C各類についてはどうだろうか。

否定形に関しては，上述した李1999や以下の用例などによって，A，B，C各類に属するおおよその［VR］は［V不R］として成立すると言えよう。

⑯老总们误会了，这次派面原来是按人头派的，但面总收不齐；
［收齐］A類〈刘-118頁〉
（将軍様方は誤解しています，この度の小麦粉の割り当ては人数に拠ったのですが，小麦粉は決して集め揃えられません。）

⑰可是，我仍然学不坏！［学坏］B類〈琼〉
（しかし，私はやはり悪くなれない。）

⑱“怎么了？永远长不大！你今年十几岁了？”［长大］C類〈琼〉
（「何なんだ。永久に成長しないのか！おまえは今年十何歳になったのだ。」）

しかし，肯定形については否定形のようにA，B，C類の全てが成立するとは判断できない。2．2において，［R］で示される結果が動作主の希望（期待）を伴なわない，通常好ましくない結果である場合は［V得R］として成立しないことを述べた。このことは，また非理想的な結果が現われることを示す，〈表2〉のB類に属する多くの［VR］にも適用できそうである。つまり，B類の“学坏”“洗破”“搞坏”などは通常，動作主の希望を伴う結果を表さず，肯定形が成立しないと判断できる。また，このB類の［R］の性質を見ると，〈表2〉からわかるように“贬义形容词”に限定される。このため“贬义形容词”で構成される［VR］は，可能を表す［V得R］は成り立たないことが指摘できる(20)。このほか，〈表2〉C類の［VR］の中には“贬义形容词”で構成される“变坏了”などが存在するが，これらに関しても［V得R］は成立しないと見なせる。

以上，马・陆1997の四分類に拠った意味的考察からは，（形）類［VR］

と［V“得／不”R］の構造間の関係は〈表3〉のように整理できる。また（形）類［VR］の［R］の性質に拠って［V“得／不”R］の成立の可否を考えた結果は〈表4〉となる。

〈表3〉

	V不R	V得R
A预期结果的实现		
洗干净了	洗不干净	洗得干净
收齐了	收不齐	收得齐
挖深了	挖不深	挖得深
剪短了	剪不短	剪得短
B非理想结果的出现		
穿脏了	穿不脏	×穿得脏
学坏了	学不坏	×学得坏
C自然结果的出现		
长大了	长不大	长得大
变富了	变不富	变得富
变坏了	变不坏	×变得坏
D预期结果的偏离		
挖浅了	△挖不浅	×挖得浅
买大了	△买不大	×买得大
挖深了	△挖不深	×挖得深
剪短了	△剪不短	×剪得短

〈無印は成立，△は成立（ただし，その使用が限定されるもの），×は不成立を示す〉

〈表4〉

〔R〕	例	V不R	V得R
褒义形容词	“干净”“对”“齐”“稳”	○	○
贬义形容词	“坏”“脏”“歪”“钝”	○	×
中性形容词	“深”“大”“短”“近”	?	?

〈？は成立の可否が単独では確定できず，その他の要素の影響を受けることを示す〉

3　総括

2章において分析した結果をまとめたものが〈表5〉である。[VR] における [R] の性質に拠って可能を表す [V“得／不”R] 形の成立の可否を理解することができ，[VR] と [V“得／不”R] の関係が明らかになる。

〈表5〉

	〔VR〕	〔R〕の性質	〔V不R〕	〔V得R〕
(虚) 類VR	听见　买到　找着　吃完 坐住　看清	虚義的成分	○	○
(動) 類VR	听懂　学会　看中　打赢 做惯　听明白	“懂”“会”類	○	○
	饿死　听厌　累死　等烦 吃腻　冻病	“死”“腻”類	○	×
	打倒　推倒　砍断　吹灭 打伤　杀死	“倒”“断”類	○	○
(形) 類VR	收齐　说对　拌匀　睡稳 背熟　洗干净	褒义形容词	○	○
	洗破　搞坏　用钝　穿脏 学坏　挂歪	贬义形容词	○	×
	挖探　剪短　走近　抬高 喂肥　切大 (预期结果／偏离)	中性形容词	○／△	○／×
	挖浅　买大　买短　剪长 垒矮　吃少 (偏离)	中性形容词	△	×

〈○は成立，△は成立（ただし，その使用が限定されるもの），×は不成立を示す。また（　）内に示すのは〔VR〕が表す意味である。〉

しかし，これらの結論は主に意味レベルの考察によって得られたものであり，当然のことながら，普遍性を具えているわけではないことを最後に

確認しておきたい。

例えば，“吃太阳”という動目構造を考えてみよう。これは意味的観点からは，“吃”の目的語には食物あるいは場所，食器という意味素性が必要であるため不適切であるとされる。ただ「伝説・寓話」といった語用的要素を加味した場合には必ずしも“吃太阳”という組み合わせは不適切であるとは言えない。これと同じ理論でもって，例えば通常ではありえないが「汚れた服が流行している」といった状況を想定すれば，その下では〈表5〉で不成立であるとした“穿得脏”が使用されるかもしれない。また，「飢饉の最中に自分が餓死すれば他人が助かる」という場面を想定するなら，可能を表す“饿得死”も使用され得ることになろう。

つまり，ある一定の語用的条件が整えば，［VR］から［V“得／不”R］の不成立に係わる意味的な要因が捨象され，その結果，〈表5〉で不成立と判断した［V得R］であっても，その使用が許容されることに留意する必要がある。

4　おわりに

以上の考察から，すべての［VR］が可能を表す［V“得／不”R］形式として成立するわけではなく，その構造間に一定の制約が加わることが明らかになったかと思う。また否定形としては成立するが，肯定形としては成立しない［VR］のタイプが存在すること，［VR］から［V得R］への構成には，［VR］から［V不R］の場合と比べ，より多くの不成立に係わる要因が作用することも明らかになった。

ただ，［VR］とは非常に生産的な構造であり，本稿で分析の対象としたもの以外にも，様々な特徴を持つものが存在する。よって両者の関係をより明確にしていくには，さらに本稿で扱えなかった［VR］とその［V“得／不”R］形についても考察を続けると同時に，［VR］を意味レベルでより細分化していくことが不可欠であるかと思う。

先に，現代小説から得られる可能を表す［V“得／不”R］形式における［R］は，そのほとんどが虚義性を具えたものであると言及したが，こ

れは［V“得／不”R］自体の性質を解明する上で注目に値する現象であろう。なぜこのような現象が見られるのであろうか。虚義性を具えた［R］の中には，その意味指向の対象が直前の動詞であるとされるものがある[21]。また2．1で述べたように直前の［V］の状態を示すとされたり，あるいは一種のアスペクト標識であると解釈されるものもある。よって，この種の［R］は，巨視的に直前の動詞との係わりが強いと見なせる。一方，本義を表す［R］には，その意味指向の対象が前後の名詞性成分であるという傾向があり，意味的に文中の名詞性成分との係わりが強いと見なせる。本来，「可能」という一つの文法カテゴリーは主に動詞に係わるものであり，これは統辞レベルのみならず，意味レベルにおいても同じことが言えよう。このため動詞と係わる虚義性を具える［R］をもつ［V“得／不”R］が多用され，意味的に文中の名詞と係わる本義性を具える［R］をもつものは必然的に少なくなるとは考えられないだろうか。

このようなことから，筆者は現段階で，虚義性を具えた［R］をもつものは，可能を表す［V“得／不”R］のいわばプロトタイプであり，本義を表す［R］をもつものは周辺的な存在であるという認識をしている。しかしこの点に関してはさらに深い考察が必要であり，今後の課題としたい。

注

（1）［VR］とはVerb-Resultative complementの省略形である。また本稿では方向補語で構成されるものは考察の対象外とした。

（2）本稿は［R］が“了”（liǎo）あるいは“得”である場合，及び“来得／不及”“対得／不起”などの［VR］形を持たず，語彙性の強い［V“得／不”R］形は考察の対象外とした。

（3）大滝1996は，［R］が形容詞であるものに分析の対象を限定しているため［VR］を［VA］と称している。

（4）大滝1996（26～27頁）から引用した。

（5）中国語で“偏离”或いは“不合某一标准”と言われる文法的意味は一般に「過分」と訳される。これは生じた結果がある基準からずれていること，見通しはずれであることを示すもので，日本語ではしばしば

「～しすぎる」と表現される。岩崎1990（71～81頁）に詳しい

（6） 高・王1996（306～315頁）では一般に結果補語と言われる［R］に対して①状态补语“表示动作或变化造成的人或物出现的新状态或动作本身出现的新状态”②评价补语“表示对动作或动作受事、结果的评价”③结果补语“表示动作有结果，这一类补语只有“见”“住”“着”“到”几个意义很虚的词充当”の三種に分類している。

（7） それぞれ，老舎『老舎文集第八巻』人民文学出版社1985，茅盾『蚀』人民文学出版社1995，钱钟书『新中国文学大系9』「围城」上海文艺出版社1990，王朔『王朔文集1纯情卷』华艺出版社1992を資料とした。

（8） 虚義的成分を除き，動詞，形容詞の判別は王1995（166～167頁）に拠った。

（9） それぞれ，趙1980（228～230頁），朱1982（138頁）を参照した。具体的には前者では“着”“到”“见”“过”，後者では“住”“开”“起来”“下去”などの補語が提示されている。そのほか，薛红1986では，［R］の位置に置かれるとき，部分的或いは完全に語彙的意味を失い，前の［V］に付随しているものとして，“掉”“住”“走”“好”“完”“见”“成”“了”“着”“透”“死”“动”を挙げている。そして，このような［R］で構成される［VR］は特殊なものとしている。

(10) ⑤及び⑩の例文は，原文では繁体字を使用している。

(11) 可能文と動作主の希望あるいは意志性といった意味素性との関連性については森田1977（475～479頁），井島1991（153～156頁），張1998に詳しい。

(12) “死”については“杀死”のように動作の受け手について述べる場合も考慮しなければならない。

(13) 意味指向とは中国語で“语义指向”といわれるもので，主に補語や状況語などの成分が文中のどの格成分と意味的な関係があるかを示すものである。

(14) 马・陆1997における分析の対象は［VR了］であるが，本稿ではこの“了”については考察の対象としなかった。

(15) 表は筆者が作成したものである。

(16) “褒义形容词”は賞賛とか好ましいという感情的色彩，“贬义形容词”はけなしとか好ましくないという感情的色彩を含む形容詞である。また“中性形容词”とは，例えば“大”“小”“长”“短”“远”“近”などの感情的色彩を含まない形容詞である。

(17) そのほか，各類の例として，A類“收齐了”“说对了”“睡稳了”，B類“学坏了”“穿脏了”“用钝了”“挂歪了”，C類“长大了”“变富了”“变坏了”，D類“买大了”“买短了”“挖深了”“剪短了”などが挙げられ

る。

(18) なぜこのような現象が起こるのかということについては，本稿では触れることができなかった。今後の課題の一つとしたい

(19) “挖浅了” を例にとれば，“挖” いう動作に関連する事物とは一般に「穴」である。“挖” という動作は穴の性質に “深” という制約を付与する。これが動作に沿った方向である。よって “挖” という動作に対して穴の性質が “浅” というのは，動作が付与する制約とは逆方向の性質であると言える。そのほか “剪长” “垒矮” などがこのタイプに含まれる。

(20) ただし例外も存在する。“贬义形容词” で構成される “打乱” “打破” などは［V 得 R］として成立しそうである。

(21) 例えば “好” “完” “清” など。高・王1996（318頁）に詳しい。

〈主要参考文献〉

井島正博　1991「可能文の多層的分析」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

岩崎　皇　1990「「動補」文における比較の二類型—過分義現象をめぐって—」『中国語学』237号

王　红旗　1995「动结式述补结构配价研究」『现代汉语配价语法研究』北京大学出版社

王　硕农等　1987『汉语动词—结果补语塔配词典』北京：语言学院出版社

大滝幸子　1996「状語中心語統合型の統合意義特徴—形容詞と動詞の組み合わせを対象として—」『東洋文化研究所紀要』第129

高　更生・王　红旗　1996『汉语教学语法研究』语文出版社

朱　德熙　1982『语法讲义』北京：商务印书馆

薛　红　1986「后项虚化动补格」『汉语学习』第6期

張　威　1998『結果可能表現の研究』くろしお出版

趙　元任著・丁　邦新訳　1980『中国話的文法』台湾学生書局

范　晓　1996『三个平面语法观』北京语言学院出版社

马　真・陆　俭明　1997「形容词作结果补语情况考察（二）」『汉语学习』第4期

森田良行　1977『基礎日本語Ⅰ』角川書店

陆　俭明　1990「“VA了” 述补结构语义分析」『汉语学习』第1期

李　敏　1999「形容词与否定副词 “不” 组合的语义、句法制约」『南京师大学报』第2期

〈例文出典〉

〈钱〉　钱　钟书『新中国文学大系９』「围城」上海文艺出版社1990
〈茅〉　茅　盾　『蚀』人民文学出版社1985
〈老五〉老　舍　『老舍文集第五卷』人民文学出版社1983
〈朱〉　朱　自清『朱自清散文全集・上卷』江苏教育出版社1996
〈張〉　張　愛玲『張愛玲小説集』皇冠出版社1989
〈刘〉　刘　震云『黄花土塬』江苏华艺出版社1996
〈老八〉老　舍　『老舍文集第八卷』人民文学出版社1985
〈赵〉　赵　树理『赵树理文集第１卷』工人出版社1980
〈琼〉　琼　瑶　インターネット『黄金书库』琼瑶小说集「窗外」「幸运草」を利用した。

無標の例文はインフォーマントのチェックを受けた作例である。